



小野木朝子
クリスマスの旅

河出書房新社

クリスマスの旅

昭和四十七年六月十日 印刷
昭和四十七年六月十五日 発行

七五〇円

著者 小野 木 朝 子

発行者 中 島 隆 之

印刷者 堀 雅 博

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六
電話東京(五三)三七一一番(代表)
振替東京一〇八〇二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求め
の書店にてお取り替えます。)

印刷・文弘社 製本・大口製本

©1972 Asako Onogi Printed in Japan

0093—037216—0961

装画
海老原喜之助

クリスマス
の旅

クリスマス の旅

その夕方、〈彼〉がひとりいつものランチアを走らせていると、T町から横浜へ向う長い坂を下りたところで急に視界が開け、もう何回も通ったことのある道が突然見知らぬ道のようになり、そしてその真白いトレイシング・ペーパーみたいな道路が、前方の遙かな雲の中へふわりと巻き上っているような気がしたのだ。

道の両側は一面の野菜畠、空は暮れなずむ海のように穏やかな灰色で、その厚い雲の層のところでどこに残った僅かな輝きが、潮騒のような響きともいえない幽かなざわめきを伝えていた。〈彼〉は車の乳白色の車体が、そのままアスファルトの道に乗って、海とも空ともつかない軟らかな灰色のひろがりの中へ軽やかに滑り込んでゆく気がした。彼はそのときほんとうに、自分がそうなってしまうことを望んでいた。

「何故ならおれは哀しいような、何となく不安な気分だったからさ。そんな人間らしい感覚を取り戻したのは久しぶりのことだった。心が凍結を解かれた軟体動物みたいに軟かく、生温かく、ゆっくりと動き始めるのが分ったのだ。それは最初のうちのもの珍しかった。が次第にそれが生き

生きと活動し始めるようになると、おれはだんだん胸苦しくなり、そのうちほんとうに息が詰まりそうになった。悪い夢に締めつけられるみたいに。そのとき突然理由もなく、おれは思い出したのだ。今夜はクリスマス・イヴだ、って。

おれは夢中で、長距離ドライブ用に調整してある柔らかなアクセルを踏み込んだ。おれは傾いたサイドミラーの中に、道路が車の走り去るはしからくるくと捲れ上り、やがて回転する巨大なコンベア・ベルトみたいに音もなく車を追いかけてくるのを見ていた。おれはイヴの、灰色の空へ向って走った。いつものおれらしくもなく両掌に汗をかく位じっとハンドルを握りしめて。

するとおれの周りに長い間降り積り、おれを閉じこめ身動きも出来なくしていた時間が少しずつ崩れ始め、やがてさらさらした粒になって車の外へ流れ始めたのだ。おれは不思議に幸福な気分になり、いつそう車のスピードを上げた。車窓に風が流れ、はげしい渦を巻いて運転席のおれにとびかかった。時間はこなごなに砕け、ランチアは粉微塵になったおれの過去の時間を、白い発泡スチロールの、無限に小さい粒を散らすように撒き散らしながら走った。おれは思った。おれは自由だ。とうとう旅に出たのだ。おれの前には無限の空間がある。ガスに包まれた天体のように、不安と懼れを星のように鑲ばめた、無限に軟らかな天空のひろがりだ。」

「彼」は勢いよくそこまで喋ってきて、まるで何かに突き当たったみたいにぼきんと黙り込んだ。　「と思ったのもほんの束の間さ。」

「彼」は少しもの憂そうに新しい煙草を啞えながら言った。

「たちまち何かを警告するみたいに車体を真赤に塗った車が、ダート・ゲームの投げ矢よろしく

すっとんで来て、危うくランチアの鼻先に突き刺さるところだ。そしてそれからもうめっちゃくちゃさ。車、車、車の連続だ。前からもそして後からも、魔法みたいに車が次々と湧いた。おれのランチアの二、三台後には、マイクを入れっ放しの黄色い宣伝カーだ。それが頭の割れそうな音でヘサイレント・ナイトを流しやがる。おれは風に乗リ損ねて逆戻りしてきた時間の屑と、胸の中の軟体動物とクリスマスの騒音に息が詰まりそうになり、気がついたらまもなく第三京浜のインター・チェンジにかかるところだった。おれはあわててフラッシュをつけて。そうしたら、眩いオレンジ色のランプが、正確にその時のおれの心臓の鼓動に合わせて動き始めたのだ。ドッキン、ドッキン、ドッキン――。

右折してフラッシュが消えたとともに、おれの心臓の鼓動も止った。おれは風のない室内に再びじわじわと沈澱し始めた時間の重い堆積を感じ、その堆積に埋れてゆく自分を感じた。おれの目の前から空が消え、おれの周囲にはもと通り、いろんなものが犇き合っている。停滞した黒い車の列のように――。それからもう一本道で、おれはフラッシュに手を触れずに走った。そのせいかどうか知らないが、おれの心臓はそれ以来、止りっ放しのような気がするんだ。去年のクリスマス・イヴ以来……。」

いつも、私は〈彼〉の低い美しい声を微風のように感じながら、密閉された部屋の中でファイルの整理を続けていたのだった。〈彼〉が機嫌よく喋り動きまわっていると、私はそれだけで平衡を取り戻したコマのように安らかな気分になった。私はゆっくりと規則正しく、ファイルの青

い紙にペンを走らせてゆく。時々睡ったコマのようにもの憂く、時々〈彼〉のお喋りにじつと耳を傾け、そして又ファイルのナンバーやレコードの目録を確かめては仕事を続けるのだった。

しかしその日の〈彼〉は何故か疲れているように見え、そのせいかやたらに饒舌になっていた。私はいつもと同じようにファイルにレコードの曲名を記入するふりをし、時々こっそり顔を上げて彼の様子をうかがった。私はひそかに考えていた。それではやっぱり、そのときに始つたんだわ。そのとき〈彼〉は礼可南子と出逢った。私の星占いも捨てたものじゃない。私の天宮図は明確に予言していたのだ。〈彼〉が去年の十二月十八日から二十九日迄の間に、浮気な蟹座の女と知り合い、或る〈決定的〉影響を受けるようになるだろう、と。

だがこの半年ばかりの間に少しずつ感じられるようになっていた〈彼〉自身の変化、単に私の確信する精神感応の知覚だけではなく、アナウンサー部長の礼の鈍重な神経までが感じ始めていた〈彼〉の変化も、やっぱりそのことが原因だったのだろうか。それとも〈彼〉は礼や、後輩で〈彼〉のジョッキの後釜を狙っているアナウンサーの牧の言うように、〈労働過重で、ちょっとばかりばてている〉だけだったのだろうか。

そこまでは私にも分らなかつた。けれどもそんなこととは別に、私の予感、もしくはテレパシ―は、仕事中の〈彼〉のいかにも快活で歯切れの良いお喋りの背後に、どうしても消すことのできないしみ、あとみたいな微かな不安を見抜いていた。いつ、どんな時に〈彼〉が放送の途中で突然ひとことも喋らなくなり、ぽっかり開いた深淵のような恐ろしい空白、不意に訪れた夜のような黒い沈黙に私や〈彼〉のファンや、礼ののんびりした神経を気の狂いそうな焦燥へ追い込む羽

目になるかもしれないという……。

「つまり——あなたは旅に出なかったわけね。」

私は六月にしては蒸し暑い、澁んだ空気をふり払うように言った。

「あなたがそんなに憧れていた旅って、いったいどんな旅？」

だが〈彼〉はもう黙り込み、横を向いたままで答えなかった。彼はすでに沈黙——私たちの仕事に於ては、常に単なる空白であり死であり、敗北でしかない沈黙——の中に、私の存在を忘れてのめりこんでいるように見えた。

がしばらくすると〈彼〉はそれが癖の、まったく意味のない微笑を口許に浮かべて立ち上った。それからゆっくりと部屋の東側の、全体が一枚の厚い飾りガラスで出来た壁に向って歩き出した。それはおそらく解放的な雰囲気を室内に持ち込もうと目論まれたのに違いないが、結果的には逆に、いかにも閉じこめられた感じを与えることになったガラスの厚い壁だった。私は不意に、〈彼〉がそのまま身体ごとその壁にぶつかり、ガラスと一緒にこなごなに砕けてしまうのではないかと思った。

が〈彼〉はちゃんと立ち止り、煙草を口に咥えて外を眺め始めた。〈彼〉のちょうど足許のあたりで、ガラスの壁面を薄青く翳らせている、風に揺れ動く背の高いポプラを。それもずい分と長い間、屈折した柔い逆光に包まれ、まるで広い空間を漂う、黒い沈黙した天体のように。

私はいつもそこに一人でいた。ガラス壁に青いポプラの翳の動く四角いレコード室の中に。だ

が寂しいと思ったことはない。レコード係兼アナウンサーといった職業にしながら、私は沈黙している時間の方が好きだった。沈黙の中で私はいつも、自由な充たされた存在だった。私は時々レコードもかけず仕事もせず、一人きりで長い間じっとしていることがあった。そんなとき私は大てい、ずっと以前に或る科学辞典で読んだ、地球や宇宙のことを考えていたのだ。

へ私たちの地球は七十億年ほど前に、冷たい宇宙塵から生れました。その後熱くなった地球は、やがて冷えて現在の姿になりました。数十億年の後、地球は再び熱くなり、最後に爆発してしまふでしょう」

数十億年、という歴大な時間の堆積を、まるで一握りの砂を掴むように頭の中へ掬い取ること

に、私は目の眩むような贅沢な満足を感じた。

「麻衣子はどうもおれたちとは、大分違った感覚の持ち主みたいだな。」
知り合ってまだ間もないころ、私が初めてレコード室を訪れた「彼」とゆっくり話をしたとき、

「彼は幾分うさん臭そうに私の様子をうかがいながら言った。
「君はここにいる。この退屈で殺風景でひどく清潔な、まるでガラスの実験箱か水槽みたいな部屋の中に。それもほとんど閉じこめられているみたいだ。それなのに君はまるで宇宙の真中にふわりと漂っているみたいな顔をしている。いつでも君の望むときに、未知の天体から天体へ、星座から星座へとわたり歩くことの出来る、身軽な旅行者みたいな様子をして。」

「だってほんとうにそうなのよ。」
私はくすくす笑いながら言った。

「私にとって現実とは、つまり空想と同じものなの。だから私には人間の現在と未来にわたる可能性を、全部生かすことが出来るの。頭がひどくぼんやりして、何も考えることができない時以外はね。たとえばあなたは三十世紀に子供たちがいったいどんな勉強をしているか考えてみたことがある？ 小学校の二年生までに、子供たちはソクラテスもプラトンもプロチノスも、カントもヘーゲルもマルクス、エンゲルスも、みんな詰めこんでしまわなければならぬのよ。四十世紀には、それをみんな幼稚園までに。でなければ、二十世紀以降のことを勉強するのが間に合わなくなってしまふでしょ。私はその頃子供たちに、モリス・ルブランやイアン・フレミングや、ジュール・シムノンを読むひまがあるかどうかとても心配なの。」

「彼は黙って笑いながら私の話を聞いていた。まるで新しいお伽話を聞いている子供みたいに。そして話し終ると彼はいかにも満足そうな、皮肉な眼差しでじっと私をみつめた。

「なるほど。君の心配はよく分るよ。おれもやっぱり心配だよ。だけど、まったくそんなこと心配じゃない奴も大勢いるんじゃないのかな。たとえば礼部長や牧みたいなやつ。君のご主人はどうだったんだい。君と一緒に、君の駆け廻る世界のことをいろいろ心配してくれたのかい。」

「とんでもない。」

私はあわてて首を振り、それから六年前に別れた夫のことを何とか思い出しながら話した。

「彼は余計なことはやらない主義だったの。彼は自分の周りに存在する世界のことだけで頭が一杯で、私のことも何とか早くその世界の中に引きずり込もうとしたの。しかもかなりそれに成功したのよ。三年間、私は彼に支配され、彼の平和で息詰まるような、動きのない王国の中にじっ

としていて、それからとうとう我慢できなくなってそこをたび出したの。でも今思うと、いったい自分が何に我慢できなかったのかよく分らない。多分、生活、空想することのない時間——そんなもの。」

だがその日以来、〈彼〉と私との間には何かしら理解し合った間柄、といった雰囲気が生れた。私流の言い方をすれば、それは〈彼〉と私との間に精神感応が生じた、ということなのだった。

その午後も、私はいつものように白いレコード室で、ジョッキーの材料に使えそうな、特殊レコードの試聴を始めていた。

へ私はひとりジエ・ツエ・キユ・ソールで生きていました。ただ一人の真実な話し相手もなしに……」

私は私の好きなその出だし、出だしであってそのままエピソードでもあるその一節を朗読しているジェラル・フィリップの、低いが少しの濁りもない声、優しさで甘いたましさの滲んだ声の響きに心を奪われた。言葉の相違を別にすれば、それはとてもよく〈彼〉の声に似ていた。それは私の耳もとにというより、私の躰の一番深いところ、魂と肉の接点とでもいった部分に語りかけ、響きを沁みこませてくるのだった。

「来週の献立、どうなった？」

突然音もなくドアを開いて、〈彼〉が自分の部屋へ入るように入ってきた。

「まだなの。ごめんなさい。」

私はあわてて振り返った。